



「不便さが生み出した知恵や文化」の継承

伊方町地域おこし協力隊 橋田 豊代



地域おこし協力隊員になるまで

平成30年6月に着任して、1年が経ちました。前職は、広島の伝統産業である、針メーカに勤め、販促企画の仕事をしていました。手芸の世界は多岐にわたるので、国内外の手芸作家に助言をいただき、企画からパッケージまで何度も試行錯誤しながら、製品を完成させていきました。

一目ボレした佐田岬半島

『佐田岬半島に古い織物があるらしい』とたまたま人づてに聞き、ネットで検索したのですが、実態がよくつかめなかったため、実際に伊方町を訪れてみて、道の駅のスタッフの方に聞き、ようやく裂き織り保存会の小林氏と連絡をとることができました。

「裂き織り」とは、布をリボン状に裂いて

織り直す、リサイクルの織物です。織りあがった布は、ラグのように厚みがあり丈夫で、素朴な風合いがあります。細く長い半島は流通も悪く、布は庶民にとって大変貴重なものでした。古い布でも粗末にせずに再生させる裂き織りは、四国で唯一残る貴重な「民俗文化財」です。28年前に廃校になった木造校舎を利用して、裂き織りの体験施設「オリコの里」に初めて足を踏み入れた時の衝撃は、今でも忘れられません。古い教室の中



オリコの里にて小林氏とともに体験指導



道の駅のイベントで裂き織りの体験

にズラリと高機(たかばた)が並び、壁には裂き織りでできた仕事着や帯がたくさんありました。あたたかい気持ちに包まれ、時が止まったような錯覚を抱きました。

愛媛から広島に戻った後も、佐田岬半島で見たジオラマのような山の景色、澄み切った海の美しさ、そして魔法のように再生する「裂き織り」のことが脳裏から離れなくなっていました。まさしく、一目ボレのような感覚でした。そして翌週には、地域おこし協力隊の応募についての問い合わせを伊方町役場に行いました。電話にて、私があまりにも裂き織りに関して熱く語るのも、担当職員が「裂き織り以外に伊方町に魅力は何かないですか?」と聞かれたのですが、伊方町に2時間ほどしか滞在していませんでした。他のことを知らず、回答にとっても困りました(笑)

裂き織りの課題をラボで解決

日本各地の伝統工芸は生産者の高齢化が進み、後継者不足の問題を抱えています。



す。裂き織りもまた、同じ問題に直面しています。私は、移住してすぐに、保存会的小林氏に技術を学びました。しかし、裂き織りとは元来「物を大切にするといい精神」の表れです。私一人が技術を学ぶだけでは、伝統として続いていかなないと考えました。消えかかった伝統を、現代のライフスタイルの中に無理なく共存させていく必要があります。そのためにも、新しい商品を開発するベースとなる場所と、協力者が不可欠であることに気づきました。

そこで、昨年11月から公民館を利用して「裂き織りラボ」をスタートしました。若い世代の方が仕事おわりに参加できるように、昼の部と夜の部の2本立てで行っています。嬉しいことに、今年2月から男子中学生と5歳児の参加もあり、「裂き織りリスト」の平均年齢がグッと下がりました。子供たちの呑み込みの早さには、いつも驚かされます。



裂き織りラボにて。おばあちゃんの風呂敷の裂き織りをバッグに仕立てる中学生

「いよぎんビジネスプランコンテスト」に挑戦し気づいたこと

3年間の協力隊任期終了後を想定し

て、裂き織り事業を計画書に落とし込んでいくと、事業計画の脆弱さが見えてきました。小物などのお土産品だけでは、生計が成り立ちません。協力隊のセミナーなどの学びから、多業をしなければ、地方で個人事業主として成功するのは難しいのではないかと考えるようになりました。多業と言ってもアルバイトのかけもちをするといった意味ではなく、地域の課題を解決することを業とします。地域には、女子が宿泊したくなるような「映え」る宿も、スイーツもない。ないものは無数にあるので、ないものを業とすると、おのずと多業になります。空き家をリノベーションして、裂き織りや染めの体験、ランチのあるカフェ、仕事帰りのバー、外国人対応のツーリストインフォメーション、宿などなど。「ないものは造る」しかり



仮装して町のクリスマスイベント協賛ブースでケーキやスープの販売



いよぎんビジネスプランコンテストで伝統産業奨励賞を受賞

今後の活動
ません。ぼんやりとしていた自身の事業計画がコンテストに挑戦することによって、外郭を現してきました。コンテスト会場では、異なるジャンルの未来を創造する人たちに出会えたのも、たいへん良い刺激になりました。

地域おこし協力隊の仕事は、その地域に、もともとある原石のような資源を発見し、それを住民とともに磨いていくことだと考えます。交通が不便だった半島には、集落ごとに、独特な伝統行事や様々な風習が残っています。不便だったからこそ、裂き織りのような知恵や工夫がうまれました。こういった地域の多様性や強靱な人々の精神は、都会の生活ではなかなか出会うことがなく、現代人に新鮮に映り体験したいものです。「コト体験」を求める観光客と地元の人々が、マッチングできる場所づくりを進めていきたいと思っています。



サイクリング佐田岬50km完走



三崎高校の学生製作の映画に母親役で出演